山森亮著『忘れられたアダム・スミス
――経済学は必要をどのように扱ってきたか』

勁草書房（2024 年 7 月）、v+254 頁、ISBN:978-4-326-15487-6、定価 3,300 円（税込）

舩木惠子（武蔵大学）

本書の構成

序章
第 1 章　スミスの「見えざる手」――必要の有限性
第 2 章　スミスの「革靴」――必要の間主観性
第 3 章　スミスの「未開人」――必要は静態的か進化的か
第 4 章　メンガーの「魔法の杖」――必要の認識論的限界と市場の限界
第 5 章　メンガーの遺産――経済の二つの意味・必要・エコロジー経済
第 6 章　スミスの遺産――「相対的貧困」は無くならないのか
第 7 章　「見えざるハート」――フェミニスト経済学と必要概念
終章

1　本書の概要と著者の意図

本書は「ほしい物（欲求）」と「必要な物（必要）」の違いを分析し、その違いに鈍感になっている現代の我々に経済学のルーツを通して認識させるという目的性を持っている。著者は欲求と必要の違いをあえて無視して欲求のカテゴリーによって経済学を論じる現代の主流派経済学、つまり新古典派経済学に対して、あなた方の始祖アダム・スミスは必要概念を前提に自由市場を述べていたではないかと問うところから本書の議論がはじまる。確かに新古典派モデルのリアリティの欠如は理論と現実生活の間にズレをもたらしており、新自由主義イデオロギーと結びついていることも多くの問題がある。本書は哲学や倫理学の深い考察を経て「欲求と必要」の経済学説における変遷をたどりこの問題に切り込んでいる。

著者は序章において「人間は欲求に還元されないような「必要」を持っている」（p.6）と本書のテーマを最初に示す。ゆえに本書は「欲求と必要」概念に特化した経済学説を論理学や現象学、社会学などの豊富なアプローチから分析を試みるという斬新な論

述方法をとる。仮説演繹的でありながら存在命題を論拠としてきた現代の先進国に流布する主流派経済学に対して、当為の問題をどう考えるのか問いただす挑戦的な著者の姿が見えるようなこの本は、世の経済学者からすれば身が引き締まるような書物かもしれない。

著者は主流派経済学において論理的に必要概念が除外されていることはすでに織り込み済みだとして、ここで網羅的にそれらの議論を紹介するつもりはないとする。さらに著者は本書のテーマを三点に限定する。第一に、現代の主流派と呼ばれる経済学者たちの起源だとする経済学の「始祖」たちの理論において、必要の概念はとても重要な位置を占めていたということを示すこと。第二にその「始祖」たちの必要の概念の持つ特徴を明らかにすること。第三にその特徴を今、我々が注目することの意味を明らかにすることだと論じる。著者が「始祖」として取り上げる経済学者はアダム・スミスとカール・メンガーである[(1)]。

著者の「必要」概念は1章ではアダム・スミス『国富論』における利己心による自由市場の働きを示す「見えざる手」の解釈から論じられる。「見えざる手」は現代では一般的に人々の利己心（欲求）によって自由市場がうまく「均衡」するととらえるが、著者によればスミスの自由市場の正当化それ自体が必要概念を前提にしており、社会の最下層の人々の必要が充足されるメカニズムの探究がスミス経済学の出発点だったと述べている。つまりスミスの自由市場正当化の理論の基礎には人間の必要の有限性があり、スミスには社会の全員に必要充足させるという意図があるという。さらにスミスは主観ではなく客観に基づき同感の原理という間主観的理論の上に経済学を構築したと論じる。ゆえにスミスはトマス・アクィナスやグロティウス、プーフェンドルフらの述べた「必要という権利」をポリティカル・エコノミーの領域に移したのだと主張する[(2)]。従って著者は現代においてもスミスは忘れられるべき存在ではないのだと主張するとともに、本書における必要の議論を限界革命以降の経済学に拡大させる。著者は1章から3章でスミスを、4章と5章でメンガーを扱い二人の経済学の「間主観的」[(3)]な必要概念を解明し現代の我々に与える意味を探る。本書は時に哲学的な経済学方法論を論じながら、つづく6章以下でケインズ経済学やフェミニスト経済学を扱い、より具体的に経済学における「必要」の存在論を論じる。そして終章においてこの議論の今日的意味を検討するという構成となっている。以下に著者の意図をもう少し詳しく述べることにしよう。

第2章　スミスの「革靴」――必要の間主観性　では必要とするものの間主観性、つまり人がどう思うか、思われるか人対人の相対的な感情がテーマである。慣習によってその時代の「必要」は認識される。貧しさは恥辱の感情を生み、恥辱は「無視される」

「是認されない」感情を生じさせ、さらに恐怖の感情がそこから生じる。スミスの時代の「必要」だった革靴は現代のスマホでも話は同じことである。このように必要とは間主観的であることを著者は論じるが、限界革命以降の新古典派経済学は個人の主観主義的理論であり、個人間比較は不可能という方法論の下で主観的な欲求によって成り立っている。ゆえに著者はスミスの革靴のような間主観的概念は除外され、必要の概念は主流派経済学から追放されたのだと論じる。

第４章メンガーの「魔法の杖」――必要の認識論的限界と市場の限界　では、主観主義の立場をとるメンガーの死後出版された『経済学原理』二版（1923）に加筆された第１章「必要／欲求の理論」について論じている。ここで著者はメンガーが述べる事柄が必要と欲求を重ねるものだとして「必要／欲求」（「欲求／必要」とする時もある）をタイトルにあてている。いずれにしても著者は主観主義学派のカール・メンガーに客観性や間主観性があることを論じメンガーの「主観」理論には主体の持つ「必要／欲求」がまちがいなく価値を生じさせていると主張する。しかしオーストリア学派の始祖であるメンガーの後継者（遺産相続人）の経済学者はこうしたメンガーの残した必要／欲求概念を無視するか批判するかして受け入れることが無かったと批判する。

しかし**第５章　メンガーの遺産――経済の二つの意味・エコロジー経済学**　において著者はカール・ポランニーやK.W. カップという反主流派経済学がこうしたメンガーの必要／欲求概念に注目しメンガーの後継者たちのメンガー評価を批判しつつ、特にポランニーのメンガー経済学の二つの方向性の解釈に対して八木の理論を引用しながらメンガーの必要／欲求概念について独自の読解をする。それはメンガーの中にある間主観的・客観的な必要の問題を扱う（真の経済）方向性と一方で経済を購買力に基づく充足手段として数量のみを資源配分に充てる技術的（節約化）方向性という二方向の発見である。著者はこれをコインの裏表のような関係でありメンガーの理論の二面性と連携すると論じている。

第６章スミスの遺産――「相対的貧困」は無くならないか、第７章「見えざるハート」――フェミニスト経済学と必要概念　では徐々に著者の意図する世界が見えてくる。著者はケインズの『孫の世代の経済的可能性』（1939）を読み解き、ケインズの言葉「絶対的必要」と「相対的必要」を分析する。ケインズの述べる「相対的必要」とは「それを満たせば周囲の人より上になり優越感が持てる時にのみ必要となるもの」だが、著者はこのケインズの言葉に疑問を呈し、ピーター・タウンゼントの「貧困の再発見」の理論やアマルティア・センの「ケイパビリティー」の理論をケインズの述べた２分法からこぼれ落ちるものに必要な理論であるとして論じていく。著者はタウンゼントの貧困概念の「相

対的はく奪」という言葉、またセンの必要を基本的なケイパビリティー、すなわち「人が基本的な事柄を成しえること」ととらえる立場から双方の支持者たちによる理論的対立があることを示唆しながらも、両者の共通性とスミス的存在論と認識論の可能性を哲学的に探ろうとする。人が自分自身の「必要」を把握することには認識論的な限界があるのは確かであるが、両者ともにスミス同様に欲望とは異なり、必要の有限性を認めているとその共通性を論じる。著者はソースティン・ヴェブレンの「顕示的消費」の概念をそこに挟みながら「相対的貧困はジェラシーやコンプレックス」により生じるとする現代的理解は誤りだと主張する。つまり著者の主張は「相対的貧困」とは「必要」の問題なのであり、社会的排除の問題とは異なるのだと存在論的、認識論的な議論をもとに導き出していく。また著者は主流派経済学が人の必要充足において無償のケア労働を視野の外に置いてきた事実を重くとらえ、フェミニスト経済学が他者の必要を充足する活動を議論し、分析する学問運動として 1990 年代に勃興したことを高く評価する。さらに著者は不可視のものとされてきたケア労働の分析がどれほど必要であるか、パンデミックを体験して人々が確かに実感したにもかかわらず、未だ議論が深まることが無いと嘆く。そして著者はこのような現実の必要概念を経済学の中心に据えるフェミニスト経済学の議論に触発されながら終章においてあらためて必要概念が経済にとって重要であること、そしてそれは「間主観的な必要」であることを強調するのである。

2　本書の意義と今後の展望

フライシャッカーは「貧困によって貧者の私生活に加えられる危害に初めて幅広い関心を示したのは、ルソーではなくスミスであった」（訳：93）と述べて分配的正義に大きく貢献したのはアダム・スミスであると評価する。本書はその貢献がスミスの子孫たちに共有されず現代では忘れ去られてしまったのだという強いメッセージが伝わる本である。またそれゆえに冒頭で述べたように経済学に携わる者は身を引き締めて聞かなければいけない言葉の数々が述べられた本でもある。理論と現実の問題は奥が深い。19 世紀末にアルフレッド・マーシャルが「経済学者の旧世代と新世代」と題する講演で「経済学者は超専門家集団であり社会に対してカタログを提示するのみであり、次の専門化集団である企業の熟練者たちがそれを利用し実業界に浸透させていく」と述べたように主流派経済学である新古典派経済学は技術的に磨き上げられた美しいカタログとして市場経済を拡大するツールとしての役割を担っていく。しかし本書の 5 章で述べられる制度派のポランニーやカップ、6 章のセンやタウンゼント、さらにフェミニスト経済学によってスミスの遺産である「必要」の概念がメンガーを経て継承されているとすれば、これら異

端派経済学、つまり反主流派経済学が現代ではスミスの継承者ということになる。著者の最初の問いである「必要を経済学がどのように扱ってきたか」（p.6）の答えの一つは今後異端派経済学の理論の歴史に見出せるだろう。そして著者の言う「真の経済」を見せてくれる経済学とは何だろうと私たちに考える機会を与えてくれる本書の意義は大きい。

【脚注】

（1）この二人は経済学に革命を起こした人物であり、一般的に経済学にはアダム・スミス革命、限界革命、ケインズ革命という転換点がある。カール・メンガーは限界革命トリオ（ジェヴォンズ、ワルラス、メンガー）の１人であり、スミスは古典派経済学の「始祖」でありメンガーは新古典派経済学の「始祖」の１人である。

（2）アリストテレスは正義を応用的正義と分配的正義に分類する。トマス・アクィナスはアリストテレスの倫理学を『神学大全』に導入した際に交換的正義と分配的正義に明確に分類し交換的正義を市場経済の正義に発展させた。そのため商品経済は交換的正義を中心に形成され資本主義経済が発展していくなかで分配的正義（必要性という権利）は経済学の概念が希少性にシフトするまでは重要視されなかった（柳沢：14-15）。

（3）間主観性という言葉はアダム・スミスの『道徳感情論』における「いささかも利己的でない観察者」の存在が示す自己にとって必要な物は他者にも必要であると同感する作用としての同感の原理を意味するとみられる。

【参考文献】

Becchio, Giandomenica (2020) *A History of Feminist and Gender Economics*, Routledge.

Fleischacker, Samuel (2004) *A Short History of Distributive Justice*, Harvard University Press (『分配的正義の歴史』(2017) 中井大介訳、晃洋書房).

岡本哲史・小池洋一編著(2019)『経済学のパラレルワールド――入門・異端派総合アプローチ』新評論.

柳沢哲哉 (2018)『経済学史への招待』社会評論社.